

「誰が為に闘う」

— 1 稿 —

2026/07/23

山極 瞭一朗

〈人物表〉

澤田 さわだ 雪菜 ゆきな	(18)	サッカー部主将
掛方 かけがた 咲希 さき	(18)	雪菜の部活仲間
相木 あいぎ 桜 さくら	(18)	雪菜の部活仲間
敷田 しきた 四郎 しろう	(34)	雪菜の部活顧問
五十嵐 いがらし 荒清 あらかみ	(42)	予備校講師

1.

競技場・控室（昼）

サッカー部主将の澤田雪菜（18）を中心に、円陣を組んでいる。

その中に部員の掛方咲希（18）や相木桜（18）。顧問の敷田四郎（34）は壁に寄りかかり、彼女たちを見ている。

雪菜 「ここで勝てば、関東大会決勝に上げれる」

雪菜、全員を見渡し、

雪菜 「みんな、絶対勝つよ」

全員で声を合わせ、

全員「One for All. All for One.」

2.

競技場・グラウンド（昼）

サッカーの試合の真っ只中。

大歓声に包まれる観客席。その中に帽子をまぶかに被った五十嵐荒清（42）の姿もある。

『頑張れ、町高！！』と記された横断幕が掲げられている。

雪菜、部員からパスを受け取る。

町高のゼッケン。背番号は9。

ゴールに向かって全速力でドリブル。

電光掲示板には町田高校と相模高校の得点が掲示されている。『3―4』で町田高校がビハインド。

会場、雪菜コール。

すると、雪菜に相手チームの選手が迫る。

雪菜、ハッとしてぐくりと唾を呑む。

咲希の声「雪菜」

と、咲希の叫ぶ声。

雪菜、チラッと見る。

咲希が手を掲げて合図する。

目前にゴール。

しかし、相手チームの選手が迫る。

雪菜、瞬時悩み、そして……

雪菜「咲希、お願い」

咲希にパスを出す。

会場は一気に静まり返る。

ボールは咲希に向かって飛んでいく。

だが、咲希に届く直前、相手チームの選手がボールを奪取する。

雪菜、思わずその場に立ち止まる。

試合終了のホイッスルが鳴る。

相手チームの選手たちは歓喜に声を上げる。

会場もどっと湧き上がる。

雪菜 「そんな……」

その場に崩れ落ちる。

目の前にはゴールがある。

観客席の五十嵐、ふっと口角を上げる。立ち去る。

3. 競技場・控室（夕）

雪菜、桜たち部員から取り囲まれている。

凍てつくような冷たい視線。

雪菜、申し訳なきそうにポツリと、

雪菜 「……ごめん」

桜 「あんたも、私たちも、これで引退なんだよ」

隅の方で、咲希は俯き、涙を流している。

雪菜、咲希をチラッと見るが、何も言えない。

桜 「どうしてもあの場でシュート打たなかったの」

雪菜、拳をぎゅっと握る。

桜 「あんたが打ってたら同点。延長で勝つことだってできたかもしれない。なのに……」

桜もこみ上げるものがあって、言葉を吞み込む。

雪菜 「ごめん……」

桜 「だから、ごめんじゃなくてさ……」

敷田、入って来て、

敷田 「まあまあ、その辺に」

桜 「先生……」

敷田 「雪菜だってチームのことを思ってた。咲希だって懸命に闘った」

咲希、ゆっくりと顔をあげる。

敷田 「誰も悪くない」

桜 「でも——」

敷田、諭すように、

敷田 「One for All. All for One.」

雪菜、敷田をじっと見つめる。

敷田 「忘れたわけじゃないだろう。みんなよくやった。立派な

最後だった」

しかし雪菜は堪えきれずに、

雪菜 「……こんなはずじゃなかった」

敷田 「雪菜？」

雪菜、咲希を一瞥して、逃げるように立ち去る。

咲希 「……雪菜」

と、雪菜を追いかける。

4.

競技場・裏門・外（夕）

雨が降っている。

雪菜、傘も差さずに、門から出てくる。

追いかけるように、咲希もやって来て、

咲希 「雪菜」

雪菜、ピタッと立ち止まる。振り返らずに、

雪菜 「……来ないで」

咲希 「ごめん。……ごめん、私のせいで」

雪菜、目を閉じる。そのまぶたから涙が一筋落ちる。

震える声で、

雪菜 「……咲希のせいじゃない」

咲希 「だって私が——」

雪菜、遮って、

雪菜 「違う」

そして振り返り、咲希に笑って見せて、

雪菜 「大丈夫、咲希のせいじゃないから」

咲希 「……」

雪菜 「またね、今日は先帰る」

と、早足で立ち去る。

咲希、追いかけられずに、その場で立ちつくす。

5. 高校・外観（昼）

年季の入った古びた校舎が建ち並ぶ。

6. 高校・体育館（昼）

カリスマ予備校講師の五十嵐、高3生たち相手に演説中。

スクリーンに『受験の心得』と記されたスライドと『新生予備校 代表 五十嵐荒清』の文字。

五十嵐「受験はよく団体戦と言われる」

俯いていた雪菜、ふと顔をあげる。

五十嵐「だがそんな言葉はまやかした。受験は個人戦でしかない。自分以外は全員敵だと思え」

雪菜に視線を向ける。

五十嵐「One for All. All for One.なんて言葉があるが、それほど受験に似合わない言葉なんてないな」

視線を逸らし、全体を見渡して、

五十嵐「いいか、高3の夏、どういう理由でこの時期から始めるのかわからんが、今から遅くはない」

雪菜はじつと五十嵐を見つめている。

7. 高校・正門・外（夕）

五十嵐、校名板に寄りかかっている。

雪菜、門をくぐって出てくる。五十嵐に気付いて、

雪菜「あっ……」

五十嵐、ニヤリと笑い、

五十嵐「澤田雪菜だな」

雪菜「どうして私を？」

五十嵐「サッカーはもういいのか？」

雪菜、頬を歪めて、

雪菜「なんで……」

五十嵐「君のパスのせいで負けた」

雪菜「……」

五十嵐「訊きたいと思っていたんだ。どうしてあの場でパスを出した？ 素人目から見てもシュートを――」

雪菜、遮って、

雪菜「仲間を、信じたんです」

五十嵐、鼻で笑い、

五十嵐「君の欠点だな」

雪菜「欠点？」

五十嵐「君は誰の為に闘っていたんだ？」

雪菜「仲間の為です」

五十嵐「ではあのパスは正しかったと断言できるか？」

雪菜「それは……」

五十嵐、雪菜に近づき、

五十嵐「本心を言ってみろ。もう答えは出てるはずだ」

雪菜、五十嵐をじっと見つめる。そして本心がポツリとこぼれる。

雪菜「……後悔」

五十嵐「後悔？」

雪菜「思っちゃったんです。どうしてパスを出したんだって」

五十嵐「それで？」

雪菜「あの時パスを出していなければ、点を取れていたかもしれない。いや、絶対シュート決めていました」

五十嵐「私もそう思う」

雪菜「え？」

五十嵐「One for All.の呪縛に囚われていた君は優しすぎた。もっと自分の為に闘うべきだった。あの試合だけでなく、ずっとね」

雪菜「……私のこと、知ってるんですか？」

五十嵐「無論」

雪菜「どうして？」

五十嵐「澤田雪菜」

雪菜、すつと背筋を伸ばす。

五十嵐「whyの質問が多いな」

雪菜「すみません……」

五十嵐「それで、これからは自分の為に闘う覚悟はあるか？」

雪菜、拳を握りしめる。

雪菜 「もう、後悔したくないんです……」

五十嵐、満足そうに頷いて、

五十嵐「いいだろう、ついてこい。ここからは個人戦だ」
と、歩き出す。

雪菜、五十嵐に続く。

柱の陰に咲希、じっと雪菜の背を見つめている。

雪菜、前を向いて歩いていく。

(終わり)